
許さない

雲天道風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
許さない

【Nコード】
N9876F

【作者名】
雲天道風

【あらすじ】
別れた彼女がヤンデレる、あなたはどこにもいかせない

全ての始まり

『どうして逃げるの？何にもしないよ。』

俺は今真理香と付き合っている。

告白してきたのは向こうの方だった。

別に好きでもなかったが

ただ付き合ってみたかった・・・

そんな軽いで付き合い始めた。

付き合い始めて一ヶ月が経過したある日。

転入生がやってきた。

可愛く性格も良くクラスの男子に人気だった。

俺も実は思いを寄せていたりもした。

ある日のことだった・・・

『新さん、あたしと付き合ってください。』

『えっ！』

『転入して来たときから人目見て、あなたのことを好きになってしまいました。』

転入生の香りに告白された。

『いいぜ！』

『よろしく願います。』

（真理香とは別れよう。）

そう決意した俺は香りと付き合うことに。

『なあ真理香。』

『どうしたの新？あらたまっちゃって。』

『俺達、別れよう。』

『どうして、急に？』

『ごめん、俺香りと付き合うことにしたから。』

『ヤダよ！ヤダ！別れたくない・・・お願い、ずっと一緒に居てよ！』

『ごめん・・・俺実は、お前のこと好きになったこと、一度もないんだ。』

『えっ！』

今にも泣きそうな顔をする真理香をおいて

俺は走った。

俺は凄く楽しい気分だった。

これから始まる恐ろしい出来事など知らずに・・・

第2話：真理香ヤンデレる

香り・・・ああ、あの転入生か！。

あいつが新を誘惑したんだね。

可哀想な新今すぐ取り返してあげる。

『香りさん、ちょっと話があるの。』

『はい？』

『あなた、新と付き合ってたね。』

『はい・・・。』

何が言いたいのか？という顔をしながら

香りは真理香に應對していた。

『すぐに別れてね、新の彼女はあたしだから。』

『何言ってるの？新はあたしと付き合ってる・・・。』

『あなたのせいで！新はあたしと別れたの！』

香りの言葉をさえぎり、勢いよく言う真理香。

『どうすれば良いの・・・？』

真理香の迫力に恐怖し、恐る恐る聞く香り。

『新と別れて！別れなかったら、あなたの命ないから！』

『えっ！』

さっきとは違い静かに告げられ、香りは真理香にすごい恐怖を感じた。

そして・・・

『新さん・・・話があるの・・・。』

『なんだよ？』

『新さん彼女いるんでしょ？だから・・・別れよ。』

『もう別れたよ。』

『でも彼女が可哀想だよ・・・。』

『お前その話、誰に聞いた？』

『・・・友達・・・友達に聞いたの！』

『ほっといて良いんだ！気にするな。』

『でも・・・。』

『大丈夫だって！もし真理香が何か言ってきたら言えよ。』

『はい・・・』

その一週間後

真理香が何も言っていないので、香りは安心していましたが、

『香りさん、ちょっといい？』

『あっ、はい・・・』

香りはおびえながらも真理香について行った。

『約束破ったんですもんね。本当は殺してるところだけど、仕方ないよね。』

新が・・・だから今日はこれで許してあげるね』
シュッ！

『っ、何？』

いきなり刃物で腕を切り付けられ、一瞬わけがわからなかった香り。

『次、新に近づいたら、今度は殺すから』

首にナイフを当てられ、香りは息をすることもできなかった。

そしてナイフを離すと。

『今からずっと見張ってるから、一秒たりとも見失わないようにね。
新と喋ったら、香りさん。貴方の命ないから』

そう言って、教室に戻っていった。

はあはあ・・・

開放された香りはやっと息ができ、呼吸は荒く恐怖で体が震えていた。

もう嫌、こんなの・・・

香りは新と一緒にいたいという気持ちよりも、真理香から早く解放されたいという気持ちの方が強かった。

『あゝれ？何処行っただろ？』

『どうしたの新？』

『真理香・・・あの・・・』『良いよ！』

『えっ？』

『新のことは許してあげる！だからこれからも一緒にいようね♪』

『おう！』

この時の新は、真理香の一緒にいる。という意味を、ただこれからも友達として仲良くしよう。という風にしか捕らえてなかった。

この時の会話が、これからの真理香や新、そして香りの日常に大きな変化となるとも知らずに・・・

第3話：恐怖の前日にも恐怖

家に帰ってから一眠りした俺はマダ冴えない頭のまま、香りにメールをした。

寝ぼけながら、しばらく香りの返信を待っていた。

いつも忙しくても必ず10分以内には返信が来る。

だが、今日は30分経ってもこない・・・

『きつと忙しいか何かだろう』と思った俺は、そのまま夕食を食べに一階へと降りていった。

午後7時

家族そろっての夕食。俺は最初メールが気になっていたが、親父が飯中には携帯禁止命を出しているので、確認することができなかった。

そのうちにメールのことは忘れていき、いつものように家族と夕食の時間を楽しんでいた。

午後7時30分

夕食を食べた俺は、いつものようにリビングでテレビをつけた。

自分の部屋にはテレビがないので、リビングで見るしかないのだ。

そしてメールのこともすっかり忘れ、テレビに見入ること2時間

午後9時30分

母さんが風呂が溜まったことを告げる。

俺は部屋に戻らず、そのまま風呂場へと向かった。

なんとなく疲れた一日な気がした俺は、いつもよりもやけに長く入っていた。

あんまり長く入っているから、親父が心配と、早く上がれという感情を込めながら、俺を呼びにきたので俺はさっさと風呂を出ることにした。

午後10時30分

リビングに戻り、ジュースを飲みながら、またテレビをつける。

親父が風呂からあがるまでの優雅な時間だ。

親父が上がってくると、いつも『早く寝ろ、早寝早起が一番だ!』親父の口癖だ・・・

いつも思う『ならお前しろ!』と・・・

大人は子供に言うことは、たいてい自分の出来ていないことだ。

他の親がどうかはしらねえが、うちの親父が良い見本だ。

午後11時

テレビに見入っていると、親父が現れた。

そしてやっぱりいつもの台詞。

「早く寝ろ、早寝早起が一番だ!」

ついさっきの思い返しを思い出し、口元が緩んでしまう。

「何がおかしい」真剣な顔で見てくる親父・・・また笑いそう・・・

その笑いをこらえたまま、俺は二階へと戻った。

扉を開ける前、何かを忘れていたような気と、凄く嫌な予感がし、さっきまでの口元の緩みが嘘のように、変な気分になった。

勘違い、気のせいだ。

そう考えながら、扉を開ける。

暗い部屋に目立つ光、携帯の通知を知らせる光だった。

香りか？

ディスプレイを開けると、メールが2通も入っていた。

一件目は、真理香のメールだった。

内容はこうだ

“明日決着をつけるから、あたしの試合見にきてね。後、このことは誰にも言わないでね♪”

最後に♪のついた楽しそうなメールだった。

だが、内容が理解できん。試合？

あいつ・・・なんかやってたか？

その疑問を抱きながら、今度のメールを見ると、

香りからだった。

その内容は

“助けて”

絵文字のない、SOSメールだった。

ふざけてるのか？と、思ったが、香りがいたずらでこんなメールを送るとも思いがたい。

不審に思った俺は、香りに電話をした。

プルルル・・・

プルルル・・・
プルルル・・・

出ない。

何があった？そんな疑問を抱くと、突然！

冷や汗が出、なんともいいがたい変な気分になった。

自分が倒れそうになる、貧血になったみたい・・・

血の気が引いて、たぶん今の俺はすごく青ざめた顔をしてるに違いない。

思考回路の回らない俺は、メールの意味を考えることもできなかった。

そして、どうしてこうなったのか、考えるのも出来ず、

ただ、倒れないように立つことが、今の俺にできる唯一のことだった。

だが、これが最大の恐怖ではなかった。

明日、もっと俺は恐怖することになるだろう。

一生分の恐怖が訪れてきたかのような、恐怖がやってくる。

第4話…不気味

今朝は何だか気分が悪い。

昨日はあれから香りからメールや電話は返ってこなかった。

俺はあの後どうにかしてベッドに入ることが出来、そのまま祈るようにして眠りについた。

『おはよう』

教室に上がると真理香がいつものように・・・いや、いつもよりも何処かご機嫌な様子で俺に声をかけてきた。

『ああ、おはよう』

大して気にすることもなく教室へと入ると香りが来ていなかった。いつも俺が来る頃には絶対来ているあいつが来ていない・・・

休みとでも考えればいいものだが、昨日のこともあってか嫌なことばかり考えてしまう。

『ねえ』

『うわあ！』

そんなことを考えているときに隣でまたご機嫌の良い真理香の声が聞こえてきた。

そういえば・・・

昨日のメールを思い出した。

あの解釈できないメール。

『なあ・・・お前今日の試合ってなんだ？お前なんかスポーツでもやってたのか？』

『まあ・・・そんな感じかな。ねえ、新。絶対来てね。必ずだからね。場所はね・・・』

そして放課後。

俺は真理香に指定された場所へと向った。

そこには真理香も誰もおらず、人の気配すらもしない。少し不気味なところだった。

『新』

後ろから明るい真理香の声が聞こえて少し驚く。静かだったためか、こいつの声が妙に耳に響く。

そして、何故か恐怖を覚える。

『おう・・・なんだよこんな場所に呼んで』

『言っただじゃない。ここで試合するから見てて。って』

『でもよう・・・』

こんなところで一体何の試合をすると言うんだ？

だいたいここには俺とこいつ以外誰もいねえし・・・

『ほら、早く出ておいで。香りさん』

『香り！』

俺はその光景に目を疑った。

そして目の前にいる元彼女に俺は恐怖よりももっととてもない何かを感じた・・・

第5話：恐怖の試合

『香り？』

『新・・・』

俺は目を疑った。

目の前にいるこの・・・

香りはあちこちから血を流していてとても穏やかではない格好だった。

顔は恐怖に満ちていて、光さえも映していないのではないのか・・・
そう思ってしまうほどに香りの心はどこかにあるような気がした。

『ねえ、新。見ててくれるでしょ？今から始まる。あたしの大切な試合！』

『・・・っ』

声も出なかった。

声も出せないほどに俺は恐怖した。

真理香は真剣そのものの顔でのこぎりに近い物をかばんから取り出した。

こんな物いつから持っていたのか・・・

そもそもこいつはどうしてこんな物を持っているのか・・・

そしてこの物は何のためにあるのか？

理由はこの状況・・・いやでもわかってしまう。
わかりたくもないような状況だが・・・

いかれている。

こいつは完璧にいかれてるんだ。

『ああ・・・』

香りは恐れている。

その体はとてつもなく震えている。

だが、香りも何故か刃物を持っていた。

真理香の物よりもとても小さな、ナイフに近い大きさの物を・・・

『おい・・・』

すぐに止めに入ればいい話だった。

だが俺には武器が何もない。

いくら男だからと言っても、刃物を持った女子二人を止めることは出来ない。

もつとも、香りの方はやる気ではないようだから、真理香さえ止めれば問題はないのだろうか・・・

それよりも俺はその光景に圧倒されて、止めに入るところか、体を動かせずにいた。

『それじゃあ行きましようか。香りさん。ふふふ』

不適に笑いながら真理香はのこぎりを持ってゆつくりと香りの方へと向っていく・・・

香りは震えながら、だが逃げようとはせず、ナイフをしっかりと握りしめている。

俺はただ祈るばかりだ。

どちらも怪我をしないでくれ。

正氣に戻ってくれ・・・

真理香と香りの距離が段々と近づいてくる。

『止めてくれー!!』

俺は必死の思いで声を張り上げた。

『はあはあ、やめろ・・・』

息を整えながらも一度呟く。

そして真理香に視点をあわせる。

今にも刃物を向けようとしていた真理香の手が後一步のところで止められていた。

どうやら俺の言葉が届いたらしい。

『ああ・・・』

香りは震えながら刃物を落とし、自らも倒れた。そうとう無理をしていたみたいだ。

『香り！』

俺は金縛りが解けたように体を自由に動かせるようになった。香りのところに駆けつけ、そして真理香のほうへ・・・

『どうして？ どうして新は香りさんを選ぶの？ どうしてあたしじゃないの？ 何であたしのことは好きになってくれなかったの？ どうして？ ねえ！ どうしてなのよ！』

段々と荒々しく叫ぶように尋ねてくる真理香。何処か縋り付いているようにも思えた。

『ごめん』

この光景が全て俺のせいだとしたら・・・
真理香がこんな風になったのも、香りがこんなに傷ついているのも全て俺のせいだったら・・・

いや、それは確信できなものかもしれない。
全て俺のせいなんだ。

真理香を裏切り、うやむやにしたまま俺は香りのことしか見ていなかった。

いや、香りのことすら見ていなかったのかもしれない。

第6話：欠落した記憶

その後香りをかついで家へ向おうとした時、事情を聞こうと真理香も呼ぼうとするとすでにその姿はなかった。

真理香のことも気にはなるが今は香りの手当の方が先決だろう。

家へ連れて行き香りの手当てをしてやる。

あちこちに切り傷があり、少し古い傷などもあった。

もしかして真理香からの仕打ちはこれが始めてではなかったのか？

だとしたら自分は・・・

どうしてそんなことにも気づけなかったのか？

自分は一体何をしてたというんだ。

彼女一人守れやしない。

元彼女のことをこんなにも傷つけた。

本当俺はバカだ・・・

『香り・・・早く目覚ましてくれ。ごめんな。俺のせいで・・・こんなに傷作って・・・』

まだ意識を戻さない香りに俺は優しく話しかけた。
もちろん答えは返ってこない。

ふと見ると携帯が光っていた。
真理香からだろうか？
そう思って携帯を開けた。

一通のメールが届いていた。

【新今香りさんと一緒でしょ？二人で部屋で何やってるのかな？今から真理香たんがお邪魔しに行くよ♪】

とても能天気過ぎる内容のメールだった。

二人で部屋で何してるだって？今からお邪魔するだど？

こいつ・・・俺がきちんと言ってやらなければ・・・これは俺の責任なのだから・・・

ピンポーン

ピンポンピンポン

鳴り響くけたたましいチャイム音。

主は誰かなど予想はつく・・・

『真理香・・・』

先ほどと変わらない姿で、それに何処か無邪気な・・・

『お前・・・』

『新の家なんてひさびさだなあ。一年ぐらい前かな？覚えてる？』

『お前なあ・・・』

俺の言葉が無視続け、いや・・・俺の言葉など聞こえないかのよう

に、まるで自分の世界にでも入り込んでいるかのように彼女はとも無邪気で、夢を見ているかのようだ。

『真理香！』

少し声を張り上げて名を呼ぶと、彼女は俺に気づいたようで肩を震わせた。

『ビックリするじゃない新。どうしたの？』

『どうしたって・・・今日のことで話しがしたい』

『今日のこと？って・・・何の話し？』

こいつはとぼけているのか？

だとしたらたいがいにしろ！

あんなことをしておいて、香りにあんな酷い仕打ちをしておいて・・・

それとも本当に覚えてない？

いや、そんなことはありえないだろう・・・

『何の話しだと？香りのことだ！』

『香りって・・・誰？新のお友達？』

首をかしげながら本当にわからないと言った顔をする真理香。
こいつは頭がどうかしてしまったのか？

『おい・・・こっち来い！』

そんなはずはない。

会った確かめさせてやる！

香りにあんなことをしたんだ。

香りを見てしらんふりできるわけがない！

『ちょっとどうしたの新？何か面白いものでもあるの？』

こいつの無邪気さに段々苛立ちを覚えてくる。

こいつは・・・

こういう神経してやがんだ！

部屋の扉を開け、可哀相な香りの姿を見せる。

『わっ！』

真理香は新鮮な反応をすると心配するかのように香りの体を揺さぶる。

『大丈夫ですか？ねえ新この人どうしたの？』

ここまで来ると演技とは思えない。

こいつ・・・本当どうしてしまったんだ？

異常になった真理香

真理香は本当に心配している様子で、香りのことを青ざめた顔で見ている。

『ねえ、新・・・事故にでもあったの？ううん。これきり傷だよね？もしかして通り魔とか？』

俺は真理香の反応に哑然とした。

こいつどうしちまったんだ？

『お前・・・こいつ香りだろ。香りのことはわかるだろ？』

『うーん・・・あつ、わかった。この子転校して来た子だよね？』

『ああ・・・』

嘘とは思えない反応に、俺はどう反応すればいいのかわからなかった。

『お前・・・今日試合するって・・・このメール覚えてねえか？』

『試合？』

真理香は不思議そうに俺のメールを見た。

『こんなメール送ったかな？それにあたし試合何て何もしてないよ？』

『真理香・・・。なら、俺がお前と別れて香りと付き合ってることは？』

『へ？』

その時真理香の表情が変わった。

今までの無邪気な前までの真理香ではなくなり、俺が恐怖した真理香の表情になった。

『何言ってるの？あたしと別れた？新が何言ってるのか・・・わからないよ』

真理香は泣きそうな顔になっていた。

もしかして記憶喪失とかか？

『別れたって何よ』

真理香の目から涙が流れた。

『おい、真理香・・・お前、本当に何も覚えてないのか』
その時。

『あれ？ここは・・・』

香りが目を覚ました。

『香り』

『かおり・・・あっ』

真理香はその時に全てを思い出したように、悪意に満ちた表情をした。

香りは真理香を見ると、青ざめた顔で震えた。

『し、ん・・・さん』

俺の方を見ながら、明らかに助けを求めている。

俺はどっちのを見てやればいい？

俺は思考が止まってしまったかのように、何も考えることが出来なかった。

『あなた、何でこんなとこにいるのよ。新の家まで上がりこむなんて・・・あんたなんかには新は渡さないんだから！』

真理香は座っている香りのことを踏みつけようとした。

俺はとっさに香りを横に倒し、俺も一緒に倒れて、香りを怪我させないようにした。

『新さん！』

香りは驚いたように叫ぶと、恐る恐る近づいてきた。

真理香は倒れたショックでか、意識を失ってしまったようだ。

『香り・・・ごめんな。俺、こいつのこと家まで運んでくる。それと、ちゃんと話しつけてくるから。気づいてやれなくてすまん・・・俺がこいつのこと曖昧にしたままで、香りと付き合ってた言っちゃったから。怒るに決まってるよな。真理香はただ俺とまだいたかっただけなんだ。許してやれとは言わないが、わかってやってくれな
いか？』

自分でも驚くぐらいに冷静だった。

俺はそのまま真理香を抱えて家を出た。
香りは何も言わなかった。

一体俺はどうすればいいんだよ。

今改めて考えると、俺は真理香が好きだったのかもしれないと思った。

そうじゃなかったら、俺は今真理香をこんなに心配しなかったのではないだろうか。

香りが好きなのか、真理香が好きなのか。

はっきりしないとな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9876f/>

許さない

2011年11月4日17時07分発行